聖地のこどもニュース

オリーブの木

No.85
2022年8月

▲学芸会？ディズニーのミッキーとミニーなどの可愛い衣装で嬉しそう（エルサレム・聖ヨゼフ学院小学校）

世界は今激動の時代。気候温暖化と自然災害、戦争や紛争、核の脅威、新型コロナ感染症、食糧危機など、切りがありません。時代に翻弄されるのは、常に子どもや若者たち、しかし次世代を担う彼らこそ希望の光でもあります。彼らがこの困難な時代を乗りこえて、「公正に基づいた平和実現」（SDGsゴール16）に向け汗を流せる人になって欲しいと願います。

皆様のおかげで、コロナ禍でも聖地への教育支援事業を続けることができました。一方で国境を越える移動を伴う国際交流事業は非常に難しく、計画しては延期を繰り返しました。（参加者の中には大学1年生の時から3年待っている学生もいます。）

イスラエルでは数カ月前から観光・巡礼客の入国が再開されています。私たちも、8月24日よりスタディ・ツアーを実施することにしました。もちろん万全の安全対策を講じた上で。熱心に事前研修を続けてきた学生たちは、いよいよ憧れの「平和を願う対話の旅」を実現できることを心から喜んでいます。彼らがどんな決意を持ってこの旅に参加するか、本号2～3ページをご覧ください。

皆様の温かいご支援に心からの感謝を申し上げます。　　井上 弘子

認定NPO法人
聖地のこどもを支える会
事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502
Email ispalejpn@gmail.com
TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 00180-4-88173 加入者名「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

https://seichi-no-kodomo.org

スタディ・ツアー2022への期待と決意

世界のコロナ感染拡大で延期が続いていた当法人のスタディ・ツアー「平和を願う対話の旅」。いよいよ2022年8月24日～9月5日に実施します。計8回に及んだ事前研修の終了にあたり、参加学生のこの旅にかける期待と決意を書いてもらいました。

今度は自分が種を蒔けるように

清原 崇（大学４年）

神戸大学工学部4年生の清原崇です。大学では光ファイバーを使ったモニタリングの研究をしています。

私がこの団体のツアーに興味を持った背景は、10歳の時にアフリカの飢餓や貧困の動画を見た時に、生まれた場所が違うだけで人生がこんなにも自分と変わることにショックを受けたことです。その日以来、自分は貧困や難民などの不可抗力で人生が左右される人たちのためになる仕事をしようと決意し、様々な活動をしてきました。コロナ前は途上国で農業や英語の分野でボランティアしたり、環境絵本を出版したりして、何か自分にできることはないかと探しながら行動していました。その後少しコロナの感染が落ち着いてきたタイミングでこのNPO理事の平木さんから今回のお話を聞き、複雑な歴史が折り重なった聖地で自分にできることはないかを考えるいいチャンスだと思い、参加を決意しました。

複数回の事前研修を通して、ほとんど知識がなかったイスラエル・パレスチナ問題に対する理解が深まり、宗教や人種を超えた相互理解と和平に向けた課題感を非常に重く実感しました。

悲惨な事実は過去のものではなく、今現在も続いており、世界の皆で解決に向かうため一歩を踏み出す必要があると感じます。現地実地のツアーを通じて、井上さんが蒔いてくださった「種」を自分が育て、次の世代に「種」を蒔けるようになりたいと思います。そのために短い期間ですが積極的に交流し、精一杯学びを吸収して持ち帰り、また日本から世界へと、自分たちがすべきことを実行していきたいです。

皆様のご支援のおかげで貴重な機会をいただけていることに感謝し、この活動の輪をもっと広げていこうと思います。

「スタディ・ツアー延期」で得たものを駆使して

髙橋 彩子（大学4年）

私は、次の3つの目標を意識してスタディ・ツアーに臨みます。

1 紛争が続く場所としてイスラエル・パレスチナを体感すること

2 紛争地としてではなく、「自分の故郷」としてそこに住む人々の日常を体感すること

3 プロジェクトで友だちになったイスラエル人・パレスチナ人との再会／新たな人々と出会うこと

2019年の夏、紛争問題やその当事者と直接関わってみたいと思い、当団体の国内プロジェクトに参加しました。そこではイスラエルにもパレスチナにも友だちができて、友だちの日常としての現地のリアルな話を聞くうちに、「メディアが伝えるのは現実の小さな一部分でしかない」ということを確信しました。そのプロジェクト終了時に現地を訪れる決心をして申し込んだ2020年3月のスタディ・ツアーが新型コロナウイルス感染拡大によって出発直前に中止になってから、申込みと延期のお知らせの繰り返し、今回参加を決心してから約3年越しで現地訪問が実現します。

出発を待つ時間は長く感じましたが、得られたこともありました。事前研修として月一回続けてきた勉強会で得られた知識、パレスチナの友だちに教えてもらいながら得たアラビア語のスキル、何年も待ってまで本当に行きたいのかと自問を繰り返し、より強固で明確になった「現地に絶対に行きたい」という思いです。

自分が訪れる地域は、誰かが絶対に行きたくてもおそらく一生行けない場所なのに、たかが3年間行けないだけで「長く感じた」などと表現する時点でまだ未熟だと思います。しかし、前述したようにこの3年の待機期間で得たものは非常に貴重で、2020年に現地に行った場合よりは多くの気づきを得て成長できたと思います。現地で何を感じるのか、何を得られるのか、またそれを将来どう活かせるのかは行かなければわかりませんが、先ずは冒頭の3目標を達成したいと思います。

コロナが完全には収まらず円安も進む中、多く

の人々の支えによって学生のうちに現地に行くことができることを心から感謝し、帰国後にはしっかり報告できるようにします。

ずっと興味のあった パレスチナの今を知りたい

本多 ちの（大学2年）

私は中学３年生のとき、授業でパレスチナ問題を知り、興味を持ちました。自分で調べたり、パレスチナ問題を扱うセミナーや講演会に参加したりするうち、複雑なパレスチナ問題の平和的解決ができるのか、より深く知り、考えたいと思うようになりました。

また、私が今興味あるのは、児童教育です。幼いころから、漠然と「子どもが好き」「先生になりたい」と思っており、大学で教職課程を履修する中で教育の大切さと難しさを実感しています。同時に、子ども向けのワークショップに大学生ボランティアスタッフとして参加する機会が何度かあったので、参加するたび子どもたちの心の豊かさ、優しさ、そしてポジティブさに心を打たれました。ワークショップに来る子どもたちは、ほとんどが社会問題に興味があり、なんとかしたい！と前向きに考えている、考えられる子どもたちでしたし、最初は積極的ではない子も、最終的には前向きに世の中をより良くしたい！と思っていて、彼らと触れ合い、子どもが持つ可能性のすばらしさや、他者に対する優しさを深く感じました。

このスタディ･ツアーで、ずっと興味のあったパレスチナの今を見に行きたいです。そして、パレスチナ人とイスラエル人が一緒に学ぶ学校を見学できるようなので、そこで何が教えられているのか、子どもたちは何を感じているのか、知りたいです。また、現在人生設計を考え直している最中なので、この機会を通じて、改めて自分は何がしたいか、何ができるかを見つめられたら、と思います。

平和のきっかけをどのように

三島 陽（大学2年）

私は今、長野県の大学で仏教やキリスト教を中心として哲学や宗教、中でも「異なる思想や価値観の対話」に興味を持って勉強しています。今回ツアーの紹介をいただいた際、「平和を願う対話の旅」という言葉に自分の興味と通じるものを感じ、参加を決めました。

中･高でカトリック系のミッションスクールに通っていたこともあり、イスラエルという国のおぼろげな知識はありましたが、参加を決めてからの2か月間、イスラエルやパレスチナの歴史や現在の情勢など、改めて勉強できました。インティファーダなどの対立や、イスラエルの徴兵制が抱える問題なども知り、歴史的な経緯や数々の事件、政治的な思惑などで様々な「価値観の違い」が生じていることも学びました。また、過去のスタディ･ツアーにおいて参加者が皆お互いを知り、心の痛みを分かち合って仲間となったことから、対話を通じた平和や友好の可能性もあると感じました。

相手の立場を認める対話や、お互いに完全に分かり合うことは難しいことですが、それでも対話への努力は続けなければならないでしょう。「イスラエルでの異なる価値観の対話と平和」について、何を考えるべきなのか、平和のために自分は何ができるか、また何をしないといけないのかを現地で考え、日本に帰ってからそれを他人に伝えられる、これが今回のツアーにおける私の目標です。また、将来この経験を自分の研究にも生かしながら、「異なる思想や価値観の対話」からどのように平和のきっかけを生み出すことができるか、考え、行動していきたいと思います。

暴力ではなく、対話による 平和構築を！

江口 真由（大学2年）

私は、現在大学で中東地域研究と国際協力について勉強しています。子供の頃から紛争問題に関心があり、自分と異なるアイデンティを持つ相手への他者理解について学びたいと思っていました。高校時代からは、イラクの子どもたちに対する

平和教育に関わるボランティアに携わっています。

このプロジェクトに参加することを決めたのは、こうした自分の関心に一致していたからでした。ボランティア活動を通じて、暴力ではなく、対話によって平和構築をすることの必要性とそれ浸透させることは一朝一夕にはできないことを実感していました。対話をテーマとしたこのスタディ・ツアーに参加することで、和平のためのヒントを学んできたいと思っています。現地に行って、自分と同年代の子たちの話を聞けることや自分の目で歴史を見てくる経験は、今の私にない視座を与えてくれると信じています。日本で学習してきた歴史観や中東文化論・宗教文化論にとらわれずに、肌でそのまま感じてくることを楽しみにしています。

このツアーを通じて、イスラエル・パレスチナの抱える課題と展望を学び、自分の大学での勉強に反映して、将来国際貢献の場で活かし、平和の輪を広げる役に立ちたいです。

初参加の諸君のお役に立てれば

福島 貴和（当法人理事、信州善光寺玄證院住職）

私は今までに5、6回、当法人の主催するスタディ・ツアー「平和を願う対話の旅」に参加し，今回もまた同行します。

7月17日、「JICA地球ひろば」で行われたスタディ・ツアー第4回事前研修に出席しました。参加学生諸君の課題発表がありましたが、彼らの事前の勉強ぶりに驚きました。

イスラエル・パレスチナの多岐に渡る話の中で、アイーダ難民キャンプへ行った時の事を思い出しました。入り口に大きな鍵のモニュメントがありました(cf. 写真)。説明を聞くまで知らなかったのですが、住んでいた場所を離れて難民となる時に、「将来必ずここに戻って来るぞ」と言う決意を込めて、家に鍵を掛けて出た、パレスチナ難民のそんな想いの象徴があの「鍵」なのだそうです。

もう一つ、イスラエル側の「ホロコースト記念館（ヤド・ヴァシェム）」は、学生諸君には是非訪れて、何かを感じてきて欲しい場所です。

私の今までの数回のスタディ・ツアー体験が，初めてイスラエル・パレスチナを訪れる学生諸君のお役に立てれば幸いです。

▲アイーダ難民キャンプのメイン・ゲート：巨大な鉄の鍵が50年も難民になっている人々の思いを物語る。

3回目のガザ地区訪問 ――エルサレムだより (2)

矢加部 真怜（NGO職員・2014年スタディ・ツアー参加者）

半年前に就職した国際協力NGOの仕事で、エルサレムに赴任して以来、ガザ地区を訪れたのはこれで3回目。今回の目的は、昨年の空爆で家が全壊もしくは半壊したため、家族が生計手段を失った若者を対象とした「短期就労支援事業」の視察がメインでした。

「ガザには素晴らしい能力と志を持った若者が沢山いるのに、封鎖による高い失業率やイスラエル軍の攻撃による各産業へのダメージで、持てる力を発揮できない若者が多くいる」というのは、同業者の方からよく聞く話ではありましたが、今回はそれをまざまざと見せつけられました。

地域コミュニティが運営する医療機関では、薬学部を卒業するも今まで職に就けなかったという方が、プロの薬剤師として窓口の患者に薬の説明をしていました。環境保全活動を行っている団体では、通訳の仕事をあてがわれた方が私よりずっと流ちょうな英語で、「今後のキャリアのためにももう少し事業を延長してほしい」と訴えてきました。聴覚障害を持つ児童の福祉施設で授業をしていた方は、

▲ガザの町：人口密度が世界一高いはずなのに、人影がほとんど見えない地域や時間帯も。

▲パン屋の前で：「ピタ」という伝統的な円くて平たいパン（アラブ人の必需品）を買いに集まる人々。ここでも小麦が手に入らず、食糧危機を免れない。（ガザ）

▲夜になっても食料品を求めて人が集まる。（エルサレム旧市街）

通常は覚えるのに1か月かかる手話の語彙を2週間で覚えて、誰の手も借りずに一人で授業を回していました。

特に忘れられないのは、事務担当を任命された20代の女性の話です。彼女は山積みの書類に囲まれて忙しそうにしていたのに、笑顔で応対してくれました。

事務室を出ると、同僚が私に耳打ちしました。「あの子は丁度一年前の空爆で家が全壊し、家族を10人以上失くし、本人も瓦礫の中に24時間いたのよ。今は元気そうに見えるけど、2週間前はまさに空爆から一年の節目というタイミングもあって、精神的にかなり不安定な状態で仕事を始めたの。」私は何も言葉を返すことができませんでした。

各団体の人事担当者によると、このプログラムに参加した若者は皆仕事の覚えが早く、意欲に溢れ、受け入れ団体としても貴重な戦力になっているとのことでした。

経済大国・日本で就職にも転職にも失敗を重ねた私が「援助関係者」として彼ら・彼女らと相対するのは気恥ずかしく感じる瞬間もあります。

「国際協力は、助けているのではなく、実は助けられているんだ」というのは、勘違いした「意識高い系」の学生が言いそうな文句ですが、これはある意味真理なのかもしれません。

我々が「援助」しようとしている彼らは本当にタフで行動力も能力もあって、当然ながら外国人である我々より現地のコンテクストを遥かに理解しているので、物事の動かし方をよく分かっています。

彼らがたまたま隣国や指導者や時代のめぐり合わせが悪かったために課題が山ほど生まれて、そこに我々がお邪魔して、働かせていただいている、それぐらいの感覚がしっくりきます。

私たちが出来る事と言えば、せいぜい現地の課題を事実ベースでドナーに提示し、限りのある人道支援の予算から1円でも多い資金を確保することでしょうか。（と、言うのは簡単ですが一連のプロセスは、いちいちこの上なく面倒くさいし、時には他団体との競争も避けて通れません。）

人道支援は「焼け石に水」じゃないかと言われることもあります。正直、否定できません。

支援が「その場しのぎ」にならないよう、いかに持続性を持たせるかは、毎度知恵を絞るところではありますが、ことガザへの支援に関しては、イスラエルが封鎖を解除して空爆や漁師への銃撃・農場破壊、民間人への無差別攻撃等をやめ、その上でハマスもロケット弾による報復をやめない限り、封鎖開始以来15年間続く「慢性的な緊急状態」はいつまでも続くでしょう。我々が出来ることは、本当に限られています。

それでも、「日本人は、規模は小さくても本当に我々に必要なことを、同じ目線に立って支援してくれる。」と同僚や裨益者に声をかけてもらえると、救われた気になります。彼らの信頼・期待を裏切るようなことはできない、そう自分に言い聞かせながら、出来る事を積み重ねていきます。

イランとイスラエル、核開発めぐり暗殺・テロの応酬も

村上 宏一（当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

イスラエルは、イランが核兵器の開発を進めようとしているとして警戒し、最大の脅威と見ています。そのイランで、軍人や核開発に携わったとみられている人物が相次いで不審死を遂げ、イスラエルの関与が疑われています。イラン側は報復を宣言しており、中東の懸念材料である両国のにらみ合いは、見えないところで厳しさを増す恐れがあります。一方のイスラエルでは連立政権が崩壊し、選挙へ向かいます。対イラン政策がどうなるのか、気になるところです。

革命防衛隊要人らが不審死

イランでは最近、革命防衛隊員や軍関係の技術者らが不審死する事件が相次ぎ、イラン側はイスラエルを念頭に大統領が報復を口にしています。

首都テヘランの住宅街で5月22日、バイクに乗った2人組が革命防衛隊の大佐を射殺して逃亡しました。25日にはテヘラン郊外で軍事施設が無人機（ドローン）で攻撃され技師1人が死亡、軍関係者や技師らの不審死はその後の3週間で7人にのぼったと報じられています。短期間に集中したので目立ちましたが、実はイスラエルの諜報機関によるとみられる暗殺は何件も起きており、2010年以降、革命防衛隊の幹部や核開発の中枢を担う科学者・技術者7人が標的となったと言われています。

国軍とは別の軍事組織である革命防衛隊には、パレスチナのイスラム教原理主義組織ハマスやレバノンのイスラム教シーア派組織ヒズボラなどを支援する部隊があります。いずれもイスラエルと敵対する組織で、イスラエルにとって革命防衛隊は、地域の安定を脅かし危険な存在として、その影響力を削ぐべきものというわけです。

もちろん、核兵器開発は最大の脅威で、それに携わる科学者や技師、さらには核兵器の運搬手段となる弾道ミサイルの開発に携わる者も抹殺の対象になります。イスラエル側は、自国の核兵器保有に関して肯定も否定もしないのと同様、暗殺という手段を公言はしないものの、否定もしません。

一方イラン側は、革命防衛隊の大佐殺害を受けてライシ大統領が、犯人を特定できないため名指しは避けつつ、暗にイスラエルの関与を指摘して「断固報復する」と述べました。イスラエル政府によると6月に、トルコのイスタンブールでイスラエル人を狙ったテロ未遂事件があり、複数のテロ計画を阻止したと発表しています。

核施設の空爆、過去に「実績」

イランの核開発を脅威と見るイスラエルが、核施設への空爆に踏み切るか？と取りざたされたことがあります。根拠のない話ではありません。イスラエルは1981年6月7日、イラクが建設中の原子力発電所を空爆し破壊した「実績」があるからです。イラクのフセイン政権（当時）は、石油資源が枯渇した時に備えて核エネルギーを開発しているとしていましたが、今のイランと同様、核兵器開発を疑われていました。82年7月に稼働予定とされたことに危機感を抱いたイスラエルは、F16戦闘機8機と護衛機でヨルダン、サウジアラビアの領空を侵犯してイラク領に侵入し、バグダード郊外のタムーズに建設中だった施設を空爆したのです。往復約2千キロの距離を給油なしで飛行し、防空網の死角をついて原子炉に爆弾を命中させた奇跡のような作戦で、世界を驚かせたものでした。

そんなイスラエルなら、イランに対してもやりかねないという観測も出るわけですが、防空網がさらに強まっている今、しかもイラクよりずっと遠いイランへの空爆は無謀に近いものです。しかも、そんな危険を冒さなくても、核施設の破壊工作は実施可能なようです。2021年4月、イラン中部ナタンズの核施設で爆発が起き、濃縮ウラン抽出に必要な遠心分離機への電源供給が止まったといいます。そのほか、コンピューターシステムに侵入して火災などを起こさせるサイバー攻撃も仕掛けているようです。

こうした暗殺、報復、破壊工作という物理的暗闘以外に外交的な努力というものはないのでしょうか。

核合意全否定の姿勢に変化？

イスラエルでは、おなじみの政権崩壊劇がまた始まりました。1年前の21年6月に発足した多党連立内閣は、かろうじて国会議席の過半数を押さえていましたが、政見の違いから2人の議員が連立を離脱。そんな状況下で、ヨルダン川西岸のユダヤ人入

植者に特別な法的地位を与える法律の問題で紛糾し、6月30日に国会の解散が可決されました。11月1日に、19年以来3年半で5回目の総選挙が実施されることになります。解散可決を機に極右のベネット首相は辞職、選挙までの暫定首相に中道政党イェシュ･アティッドのラピッド党首が就任しました。

就任早々の7月5日、ラピッド首相はパリを訪れマクロン仏大統領と会談し、イラン核合意についてマクロン氏が18年に提案した「新合意」を再提案するよう求めました。核合意は15年に、イランと米英仏独中ロの6カ国などが結んだもので、イランの核開発が核兵器開発につながらないよう抑制し、代わりに対イラン経済制裁を緩和するのが骨子です。

ところが、米国のトランプ前大統領がこの合意から一方的に離脱して経済制裁を強化し、反発したイランが核兵器開発につながる高濃縮ウランの生産を早める事態になっています。ラピッド首相が求めた18年のマクロン提案は、既存の合意は破棄せず、イランに対し「第三者による核開発事業監視の永続化」「弾道ミサイルの開発制限」「シリアなど地域での軍事的役割の制限」という条件を加えるというもの。ラピッド首相は、マクロン案について「中東の核開発競争につながりかねない現在の外交的手詰まり状況を打開するのに必要なもの」との見方を示したと伝えられています。

15年核合意についてイスラエルは、イランの核兵器開発を防ぐどころか助長するものだとして反対し、ネタニヤフ元首相は当時の米大統領オバマ氏を無視して米議会で合意反対演説をしたほどです。ラピッド氏の対応は、核合意を全否定するのではなく、イランに対する足かせを強めるなら反対はしない、という方針転換にも見えます。なるほどマクロン案は、イランの核兵器開発･実用化と反イスラエル組織支援という、イスラエルが暗殺という手段に訴えてでも阻止しようとしている政策を規制の対象にしています。イラン側が容易に応じる提案ではありませんが、イスラエルの側でも、選挙で政権が変わったら、核合意に対する姿勢がどうなるのかわかりません。

米大統領ともイラン協議

一方、バイデン米大統領が7月13日のイスラエル訪問を皮切りに中東を歴訪しました。ラピッド首相との会談では、イラン問題が主題になったようです。共同記者会見でバイデン大統領は、イランの核兵器保有は許さないと強調しつつ、外交こそがイランにそうさせないための最良の道だと述べました。核合意への復帰を意味し、それに加えてイランの弾道ミサイル開発とテロ組織支援を阻止するというイスラエルの方針を支持するとも言っています。マクロン案と同じようにみえますが、ラピッド首相は会見の場で「外交ではイランを止められない。軍事的威嚇を見せつける必要がある」と述べています。マクロン仏大統領に求めたと言われているのとは異なるこの対応は、イスラエル国内向けのポーズなのでしょうか。

ところでバイデン大統領はパレスチナ自治政府のアッバス議長とも会談しましたが、和平については二国家共存案を支持することを表明したものの、西岸の入植地問題などには触れず、和平交渉の可能性につながる発表はありませんでした。

認定NPO法人聖地のこどもを支える会の

会員になりませんか?

さまざまなプロジェクトをはじめ、当会の活動・運営を総合的に支えていただく会員制度。あなたのご意見が、平和のつくり手を育てます。事務局までお気軽にお申し出ください。

正会員	個人	年額 12,000円／1口
	学生	年額 6,000円／1口
賛助会員		年額 6,000円／1口

正会員は、当法人の総会等での議決権を行使することができます。

支援金の自動払込みサービス

ご好評を頂いている自動払込みサービス。まだの方はぜひご利用ください。

＊ 郵便振替、クレジットカード、どちらでも可能です。
＊ 銀行や郵便局へ、毎回払込みに行く手間が省けます。
＊ いつからでも、いくらからでも 簡単に始められます!

お申込み･お問合せは
当法人事務局 03-6908-6571
または 042-636-9218（中山）

6月から始めたコーヒー募金、イエメン産の高級モカ・マタリが好評です!

イエメン・コーヒーの魅力

コーヒーの起源は、諸説ありますが、その一つは、「13世紀にイエメンで修行中のイスラム教徒シェイク・オマールがモカの王女に恋をしてしまい、怒った王様に山へ追放されてしまった、そこでお腹をすかせた彼がコーヒーの実を食べたところ、たちまち元気になった」というお話です。

イエメンのモカ港から積み出される豆はヨーロッパ、そして世界に広まりました。有名な豆アラビカ種はイエメンが原産です。しかしイエメンのコーヒーは、昔ながらの農法で収穫量も少なく、南米や東南アジアなどのプランテーションに追い抜かれてしまいました。日本でモカ・コーヒーという名で売られていても、イエメン産はなかなか手に入りません。しかし、イエメンでは標高2000mを超える高地に段々畑が作られ、強い太陽の日差しを浴び、厳しい気候の中で育てられることもあり、独特の酸味とフルーティなワインのような、チョコレートのような甘みがあります。(株)モカ・オリジンズは、素晴らしいイエメン・コーヒーを復活させようと現地の小規模農家さんと交渉して、上質の豆をフェアトレードで輸入しています。「国際カフェ・テイスティング競技会」でも2年連続金賞を受賞したガーリブという豆もブレンドしています。他では味わえない風味が楽しめます。

イエメンで
コーヒーを挽く
ユダヤ人青年

イスラエルに伝わったイエメン・コーヒー

イスラエルには、イエメン・ルーツのユダヤ人が20万人ほどいます。彼らの祖先は、イエメンでコーヒー・ビジネスに携わっていた人もいたとか。イエメンでは、高価な豆は輸出用にし、ギシルと呼ばれる果肉を乾燥したものを煎じて飲むという習慣があり、イスラエルのカフェはヨーロッパスタイルが主流ですが、たまにイエメン・コーヒー という名でギシルを出してくれるところもあります。

パレスチナのコーヒー・セレモニー

パレスチナのコーヒーの飲み方

パレスチナでは、細かく挽いたコーヒーを取手のついたポットで煮詰めて、小さなカップで上澄みを飲みます。濃厚な香りがとてもおいしいのですが、下手な入れ方をするとカスが沈まず、口の中に残ります。こちらオスマン・トルコの時代に伝わってきたのでトルキッシュ・コーヒーと呼ばれています。

一方、古くからこの地方の遊牧民たちの間で伝わってきたのが、アラビック・コーヒーです。コーヒーとカルダモンやクローブなどを一緒に煮だし、上澄みだけをポットに入れておき、客人には、必ず最初におちょこ(フィンジャール)で一杯と、おもてなしを大切にしています。

イエメン・コーヒーは、同封のチラシでご注文ください

2022年度 総会のご報告

当法人の2022年度通常総会が去る6月12日（日）に開催され、2021年度の事業報告書と決算書、2022年度事業計画書と予算書が承認されました。

2021年度 活動計算書

2021年4月1日から2022年3月31日まで

（単位：円）

【経常収益】		
【受取会費】		
正会員受取会費	386,000	
賛助会員受取会費	90,500	476,500
【受取寄付金】		
受取寄付金	10,590,528	
施設等受入評価益	0	
ボランティア受入評価益	0	10,590,528
【受取助成金等】		
受取助成金	0	
受取補助金	0	0
【事業収益】		
参加料金収益	46,000	46,000
【その他収益】		
受取　利息	18	
為替　差益	7,111	
雑　収　益	0	7,129
経常収益　計		11,120,157
【経常費用】		
【事業費】		
（人件費）		
給料　手当（事業）	938,987	
役員報酬（事業）	754,000	
通　勤　費（事業）	71,471	
決定福利費（事業）	102,522	
退　職　金（事業）	0	
人件費計	1,866,980	
（その他経費）		
業務委託費	674,100	
諸　謝　金（事業）	33,063	
水道光熱費（事業）	37,293	
地代家賃（事業）	1,002,500	
印刷製本費（事業）	323,375	
通信運搬費（事業）	619,311	
会　議　費（事業）	18,710	
旅費交通費（事業）	272	
旅費海外（事業）	0	
研修費（事業）	2,321	
消耗品　費（事業）	5,060	
賃　借　料（事業）	0	
租税　公課（事業）	0	
支払手数料（事業）	31,703	
支払助成金(現地教育支援)	3,300,000	
その他経費計	6,047,708	
事業費　計		7,914,688

【管理費】		
（人件費）		
給料　手当	1,162,529	
役員　報酬	473,000	
通　勤　費	100,820	
法定福利費	94,635	
退職給付費用	0	
退　職　金	0	
人件費計	1,830,984	
（その他経費）		
業務委託費	249,952	
会　議　費	19,597	
水道光熱費	37,294	
地 代 家 賃	497,500	
通信運搬費	55,573	
旅費交通費	9,077	
消耗品　費	89,565	
修　繕　費	0	
広告宣伝費	0	
研　修　費	5,030	
諸　謝　金	867,945	
諸　会　費	41,375	
租税　公課	1,000	
支払手数料	172,878	
為替　差損	0	
雑　　費	0	
新聞図書費	3,850	
交　際　費	2,600	
その他経費計	2,053,236	
管理費　計		3,884,220
経常費用　計		11,798,908
当期経常増減額		△ 678,751
【経常外収益】		
前期損益修正益		5,754
経常外収益　計		5,754
【経常外費用】		
前期損益修正損		0
経常外費用　計		0
税引前当期正味財産増減額		△ 672,997
当期正味財産増減額		△ 672,997
前期繰越正味財産額		3,085,933
次期繰越正味財産額		2,412,936

【活動計算書の注記】
前期損益修正益：2019 年度未払金の一部修正

支援団体・支援者のお名前

対象期間：2021年4月1日～2022年3月31日
（敬称略　匿名希望の方のお名前は省かせて頂きました。）

支援団体

愛徳カルメル会本部修道院
イエズス会
大阪聖ヨゼフ宣教修道女会
幼きマリア修道会
オタワ愛徳修道女会
お告げのフランシスコ姉妹会 ナザレ修道院
お告げのフランシスコ姉妹会 生野修道院
学校法人育英学園　目黒サレジオ幼稚園
カトリック片瀬教会
カトリック北広島教会
カトリック金剛教会
カトリック初台教会
カトリック姫路教会
カトリック松原教会
カトリック新田原教会
カトリック川内教会
カトリック鷺沼教会古着プロジェクト
カトリック静岡教会スタニスラス会
カルメル会修道院
グアダルペ宣教会
吉祥寺教会聖地のこどもを支える会
木村洋行（株）
暁星小学校シャミナード会
厳律シトー会那須の聖母修道院
坂出聖マルチン病院
サレジアン・シスターズ管区本部
至聖贖罪主修道女会
守護の天使の姉妹修道会
殉教者聖ゲルギオのフランシスコ修道会
城星学園小学校
女子御受難会修道会
女子洗足カルメル会山口修道院
ショファイユの幼きイエズス修道会
聖アンナこどもの家 園児一同
聖クララ修道会
聖心会
聖心の布教姉妹会
聖ドミニコ宣教修道女会 坂出修道院
聖パウロ修道会
聖フランシスコ病院修道女会
聖フランシスコ病院修道女会姫路修道院
聖ベネディクト女子修道院
聖母奉献修道会
聖マリア女学院美術部
天使の聖母トラピスチヌ修道院
東京カルメル修道女会
灯台の聖母トラピスト修道院
ドミニコ会聖ヨセフ修道院
日本キリスト教団 白鷺教会
日本キリスト教団 巣鴨ときわ教会
日本キリスト教団 まぶね教会
ヌヴェール愛徳修道会 本部修道院
ノートルダム小学校ボランティアサークル
マリア会国分寺地区
マリアの宣教者フランシスコ修道会
マリアの御心会 茂原共同体
マリアの御心会 信濃町共同体
メルセス会修道院
メルセス会第一修道院
善きサマリア人修道会
横浜雙葉小学校　父母の会
レデンプトリスチン修道院
煉獄援助修道会

（65団体　順不同）

個人支援者

Fr. テヨドル・メニッヒ
Harvey Paul A.S
相葉敬子
青山美恵子
赤木啓子
赤崎克俊
浅井芳和・明子
浅沼誠子
芦川恵美子
東順子
麻生麗子
安達結美子
阿部幸子
天野直秀
天野眞理子
荒井啓史
新居孝彦
荒川淑
新里苗子
有田美江
安藤眞樹
Sr. 飯島喜久江
飯田ルナ
石黒亮
石澤雅士
石村淳子
板垣勤神父
板橋虎徹
市川恵美子
伊地知広美
井手公平神父
伊藤勝子
伊藤多恵子
伊藤ちあら
伊藤裕幸
惟康紘
井口実紀
井澤竹子
磯田幸子
磯部起与子
磯部裕子
磯部雅子
稲葉猛典
乾盛夫
井上静子
井上志帆子
井上ちひろ
井上伸之
井上弘子
井上裕
今井弘美
今村美志保
今村錬
岩﨑守
岩下直子
岩田彬人
岩田卓三
岩永千代子
岩本憲嗣
上利宏司
植村淳子
宇野節生
海堀真紀
浦田むつみ
栄林ヒサ子
荏原えり
遠藤恵美子
遠藤香恵子
遠藤浩一
遠藤久夫
及川幸子
大泉廣

イラストレーション　池永廣美

大蔵俊三
大澤由紀子
太田晴子
大谷郁子
大谷恵美子
大西茂雄･美恵
大藤則子
大和四夫
岡部浩典
岡本みどり
小川千枝子
奥村恵子
奥村聡
奥脇槙子
尾崎一三･裕子
小澤知江子
小田功司
小野修
小野佐代子
小山田匡宏
海保やすよ
柿崎ゆか子
角田和子
笠井勝子
柏貴夫･恵津子
梶原裕史
梶原晴美
春日圭子
勝原孝子
加藤喜代子
加藤恵子
加藤健三
加藤千恵子
加藤まゆみ
門倉昭博
加納貞彦
鎌田まさ子
鎌田英明
川口栄子
川口節子
河村眞理子
川本和子
瓦妙子
神原ちず子
木内一美
北楯暢子
北原豊子
木村護郎クリストフ
木村聡子
木村浩之
木村靖子
喜山聖子
金喜貞
国代京子
国峰恵子
久保久子
久保田進
熊谷マリ子
栗栖徹
黒瀧津哉子
黒田道子
小出宏子
小久保かつ
小坂田さち子
小塩恒子
小嶋則子
小西羊一･一枝
小林惇
小林美紗子
小林麗子
後藤幸
後藤秀次
後藤礼子
後藤田遊子
小山内州一
近藤加奈子
近藤緑
斉藤章太郎
坂口泰子
坂本雄郎
榊原祥子
サカタカナコ
佐々木俊之
佐々木ふみ子
薩田寿隆
佐渡一邦
里井健勲
佐藤光子
佐藤克裕
佐野彰
澤美由紀
島田みち子
清水紀代子
下路利恵子
宿澤恵子
胡美喜子
白井美代
白柳隆明
助廣弘子
鈴木國弘
鈴木賢治
鈴木成人
鈴木信一神父
鈴木登喜子
鈴木典子
関安幸
関口素子
髙井佳代子
髙井真悟
髙馬和子
髙島文枝
髙田世津
高野千草
髙橋泉
高橋和子
髙橋登志子
髙橋秀美
田川照子
柘植薫
田口幾子
武井範子
竹川典秀
竹井雅子
武田英夫
竹田美恵子
竹谷純子
竹脇美帆子
田島久仁子
立原美恵子
伊達由美子
立林久美
立脇和夫
田中さわこ
田中節子
Sr. 田中範子
田中弘子
田中美帆
谷弘子
谷口寿美枝
谷山正恵
田村万寿子
塚田道子
土田裕江
槌本和子
土屋美和子
出川展恒
手嶋直美
寺田京子
天明恭子
戸井利子
冨崎之夫
外山憲子
内藤和子
中井さつき
中尾友和
中里光代
中島紀史子
中島聖子
中島敏夫
永田ふく代
中谷美智子
長坪光
中野剛
永野明子
長野浩二
中村季子
中村寿美
中村達見
中本徹信
中山宏･夕里亜
中山泰羊･喜祈
永吉恵子
蕪木利夫
納谷昭美
西勝健夫
西田多日子
西田百合子
西原和子
西村拓生
野口重光
野坂静子
野田健太郎
野田征子
野田由利
野村孝弘
野村智美
野村泰樹
野村嘉彦
乗倉寿明
橋本和子
波多野輝栄
服部英子
花岡暐
早川昌江
林淳子
林一江
林香保里
林常広
林裕美子
葉山文子
原桂子
半田和巳
平賀徹夫司教
弘中由美
深澤美知子
深田久子
福崎順栄
福島暁和
福島貴和
福島由香子
福田青柳
福田幸子
藤井素子
藤井猛史
藤村栄三郎
藤原伸子
藤原眞理子
渕上恂子
不動彰
古田瑩子
Sr. 古屋恵子
星昇次郎
星村美絵子
細谷彬
堀田静穂
堀秀樹
本田江身
本間攝子
馬越由美
眞下まゆみ
増満由美子
松崎治男
松本武史
松山純子
馬渡二嘉
三浦和子
三浦千鶴子
三國谷信子
三島八重子
水浦敏行
水野眞由美
溝口昂明
簑島すみれ
宮倉満子
三宅康博
三宅哲子
宮澤悦子
宮下幸恵
宮野美智子
向井貴代美
目良徳枝
本橋淑子
森川久美子
森本明子
保尾真紀
安田美知子
矢谷啓子
柳田和佐
矢作憲治
山内春治
山岡節子
山口裕子
山下光子
山下るみ子
山田千秋
山田康子
山田春治
山本強
山本浩
山本勝也
横見晶子
横道昭光
横山真希子
吉川英子
吉田邦子
吉田恵子
吉田とし子
吉田友一
吉田良子
吉村毅之
米林慶子
ラザフォード貴美子
ロジェ･プロヴァンシェ神父
和田昌子
渡辺上
渡邊公伸
渡邊こずえ
渡部朋子
渡部美佐子
渡部満
渡邊禮子

（370名　内匿名希望2　順不同）

スタディ・ツアー事前研修で

▲「JICA 地球ひろば」で対面で行われた事前研修の一コマ。学生たちの議論が白熱。

「聖なる贖い主教会」（エルサレム）子ども会のサマーキャンプ

低学年は黄色、高学年はブルーのシャツ（ウクライナカラー？）ガリラヤで1週間合宿し、「平和」について学習します。（当法人の現地スタッフ、ヤクーブ・ガザウィはこのキャンプのリーダーの一人です）

▲ 低学年グループ：ディカッションゲームとダンスの練習。

▼ 高学年グループ：エルサレムで集合、これからバスでガリラヤへ。

イスラエル北部の景勝地、アッコをご紹介

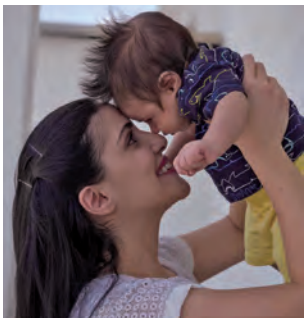
地中海に面した天然の良港。旧約、新約聖書に登場し、パウロも宣教の途中に何度か立ち寄りました。十字軍時代の要塞、オスマン帝国時代の建築物により 2001 年、世界遺産に登録されています。

▲ オスマントルコ帝国時代の城壁が望む地中海。

▲ 夕日を浴びる旧市街。海辺のカフェはいつも満席です。

▲ アラブ人独特の「スーク」と呼ばれる市場。

▲「スーク」の中のお菓子屋さん。アラブ独特の色とりどりのお菓子が並んでいます。甘〜い香り。



パトリシアと赤ちゃん

2019年の「平和の架け橋プロジェクト」に参加したパトリシア・ズロブは、昨年結婚。可愛い男の子に恵まれました。あなたも将来「平和の働き人」になってね！

写真撮影　ダリーヌ・ラマ、ヤクーブ・ガザウィ、矢加部 真怜、佐藤真紀